

宮澤賢治

どんぐりと山猫



どんぐりと山猫



おかしなはがきが、ある土曜日の夕がた、一郎のうちにきました。

かねた一郎さま 九月十九日

あなたは、ごきげんよろしいほで、けっこです。  
あした、めんどなさいばんしますから、おいでんなさい。  
とびどぐもたないでくなさい。

山猫 拝

こんなのです。字はまるで下手で、墨もがさがさして

指につくくらいでした。けれども一郎はうれしくてうれしくてたまりませんでした。はがきをそつと学校のかばんにしまつて、うちじゅうとんだりはねたりしました。

寢床にもぐつてからも、山猫のいやあとした顔や、そのめんどうだという裁判のけしきなどを考えて、おそくまで眠りませんでした。

けれども、一郎が眼をさましたときは、もうすっかり明かるくなっていました。おもてに出てみると、まわりの山は、みんなたつた今できたばかりのように、うるうるもりあがつて、まっ青な空の下にならんでいました。

一郎はいそいでごはんを食べて、ひとり谷川に沿ったこみちを、かみの方へのぼって行きました。

すきとおった風がざあつと吹くと、栗の木はばらばらと実をおとしました。一郎は栗の木を見上げて、

「栗の木、栗の木、やまねこがここを通らなかつたかい。」とききました。栗の木はちよつとしずかになって、「やまねこなら、けさはやく、馬車で東の方へ飛んで行きましたよ。」と答えました。

「東ならばくのいく方だねえ、おかしいな、とにかくもつと行ってみよう。栗の木ありがとう。」

栗の木はだまってまた実をばらばらと落しました。

一郎がすこし行きますと、そこはもう笛ふきの滝でした。笛ふきの滝というのは、まっ白な岩の崖がけのなかほどに、小さな穴があいていて、そこから水が笛のように鳴って飛び出し、すぐ滝になって、ごうごう谷におちているのを言うのでした。

一郎は滝に向いて叫さけびました。

「おいおい、笛ふき、やまねこがここを通らなかつたかい。」滝がピーピー答えました。

「やまねこは、さつき、馬車で西の方へ飛んで行きました



たよ。」

「おかしいな、西ならばくのうちの方だ。けれども、まあも少し行ってみよう。笛ふき、ありがとう。」

滝はまたもとのように笛を吹きつづけました。

一郎がまたすこし行きますと、一本のぶなの木のしたに、たくさんの白いきのこが、どってこどってこどってこと、変な楽隊をやっていました。

一郎はからだをかがめて、

「おい、きのこ、やまねこが、ここを通らなかつたかい。」

と聞きました。するときは、

「やまねこなら、けさはやく、馬車で南の方へ飛んで行きましたよ。」と答えました。一郎は首をひねりました。

「南ならあっちの山のなかだ。おかしいな。まあも少し行ってみよう。きのこ、ありがとう。」

きのこはみんないそがしそうに、どってこどってこと、あの変な楽隊をつづけました。

一郎はまた少し行きました。すると一本のくるみの木の梢こずえを、栗鼠りすがぴよんと飛んでいました。一郎はすぐ手まねきしてそれをとめて、

「おい、りす、やまねこがここを通らなかつたかい。」  
とたずねました。するとりすは、木の上から、額ひたいに  
手をかざして、一郎を見ながら答えました。

「やまねこなら、けさまだくらいうちに、馬車で南の方  
へ飛んで行きましたよ。」

「南へ行つたなんて、二とこでそんなことを言うのはお  
かしいなあ。けれどもまあも少し行ってみよう。りす、  
ありがとう。」りすはもういませんでした。ただくるみ  
の一ばん上の枝がゆれ、となりのぶなの葉がちらつとひ  
かつただけでした。

一郎が少し行きましたら、谷川にそつたみちは、もう細くなつて消えてしまいました。そして谷川の南の、まっ黒な榎かやの木の森の方へ、あたらしい小さなみちがついていました。一郎はそのみちをのぼつて行きました。榎の枝はまっ黒に重なりあつて、青ぞらは一きれも見えず、みちは大へん急な坂になりました。一郎が顔をまっ赤にして、汗をほとほと落しながら、その坂をのぼりますと、にわかにはぱつと明かるくなつて、眼がちくつとしました。そこはうつくしい黄金きんいろの草地で、草は風にざわざわ鳴り、まわりは立派なオリーブいろの榎の木の森でかこ

まれてありました。

その草地のまん中に、せいの低いおかしな形の男が、膝を曲げて手に革鞭かわむちをもつて、だまってこつちを見ていたのです。

一郎はだんだんそばへ行つて、びっくりして立ちどまつてしまいました。その男は、片眼で、見えない方の眼は、白くびくびくうごき、上着のような半纏はんてんのようなへんなものを着て、だいいち足が、ひどくまがつて山羊やぎのよう、ことにそのあしききとききたら、ごはんをもるへらのかたちだったのです。一郎は気味が悪かったのですが、

なるべく落ちついてたずねました。

「あなたはやまねこをしりませんか。」

するとその男は、横眼で一郎の顔を見て、口をまげてにやつとわらって言いました。

「やまねこさまはいますぐに、ここに戻ってお出であるよ。おまえは一郎さんだな。」

一郎はぎよつとして、一あしうしろにさがって、「え、ぼく一郎です。けれども、どうしてそれを知つてますか。」と言いました。するとその奇き体たいな男はいよいよにやにやしてしまいました。

「そんだったら、はがき見だべ。」

「見ました。それで来たんです。」

「あのぶんしょうは、ずいぶん下手だべ。」と男は下をむいてかなしそうに言いました。一郎はきのどくになつて、

「さあ、なかなか、ぶんしょうがうまいようでしたよ。」

と言いますと、男はよろこんで、息をはあはあして、耳のあたりまでまっ赤になり、着物のえりをひろげて、風をからだに入れながら、

「あの字もなかなかうまいか。」と聞きました。一郎は、





「あのはがきはわしが書いたのだよ。」一郎はおかしいのをこらえて、

「ぜんたいあなたはなにですか。」とたずねますと、男は急にまじめになつて、

「わしはやまねこさまの馬車別当だよ。」と言いました。

そのとき、風がどうと吹いてきて、草はいちめん波だち、別当は、急にていねいなおじぎをしました。

一郎はおかしいと思つて、ふりかえつて見ますと、そこに山猫が、黄いろな陣羽織じんばおりのようなものを着て、緑いろの眼をまん円にして立っていました。やっぱり山猫の

耳は、立って尖とがっているなど、一郎が思いましたら、山猫はびよこつとおじぎをしました。一郎もていねいに挨拶しました。

「いや、こんにちは、きのうははがきをありがとう。」  
山猫はひげをぴんとひっぱって、腹をつき出して言いました。

「こんにちは、よくいらつしやいました。じつは一昨日おとといから、めんどろなあらそいがおこつて、ちよつと裁判にこまりましたので、あなたのお考えを、うかがいたいと思いましたが、思いましたのです。まあ、ゆっくり、おやすみください。」

じき、どんぐりどもがまいりましょう。どうも毎年、この裁判でくるしみます。」山猫は、ふところから、巻たばこの箱を出して、じぶんが一本くわえ、

「いかがですか。」と一郎に出しました。一郎はびっくりして、

「いいえ。」と言いましたら、山猫はおおようにわらって、

「ふふん、まだお若いから、」と言いながら、マッチをしゅつとすって、わざと顔をしかめて、青いけむりをふうとはきました。山猫の馬車別当は、気を付けの姿勢で、

しやんと立っていましたが、いかにも、たばこのほしいのをむりにこらえているらしく、なみだをぼろぼろこぼしました。

そのとき、一郎は、足もとでパチパチ塩のはぜるような、音をききました。びっくりしてかがんで見ますと、草のなかに、あっちにもこっちにも、黄金きんいろの円いものが、ぴかぴかひかっているのです。よく見ると、みんなそれは赤いずぼんをはいたどんぐりで、もうその数ときたら、三百でもきかないようでした。わあわあわあわあ、みんななにか言っているのです。

「あ、来たな。蟻のようにやってくる。おい、さあ、早くベルを鳴らせ。今日はそこが日当りがいいから、そこのとこの草を刈かれ。」山猫は巻たばこを投げすてて、大いそぎで馬車別当に言いつけました。馬車別当もたいへんあわてて、腰から大きな鎌をとりだして、ざっくざっくと、山猫の前のとこの草を刈りました。そこへ四方の草のなかから、どんぐりどもが、ぎらぎら光って、飛び出して、わあわあわあ言いました。

馬車別当が、こんどは鈴をがらんがらんがらんと振りました。音は櫃かやの森に、がらんがらんがら

んとひびき、黄金きんのどんぐりどもは、少ししずかになりました。見ると山猫は、もういつか、黒い長い縹しゆす子の服を着て、もったいらしく、どんぐりどももの前にすわっていました。まるで奈良のだいぶつさまにさんけいするみんなの絵のようだと一郎はおもいました。別当がこんどは、革鞭を二三べん、ひゆう、ぱちっ、ひゆう、ぱちっ  
と鳴らしました。

空が青くすみわたり、どんぐりはぴかぴかしてじつにきれいでした。

「裁判ももう今日で三日目だぞ、いい加減になかなおり

をしたらどうだ。」山猫が、少し心配そうに、それでもむりにいばって言いますと、どんぐりどもは口々に叫びました。

「いえいえ、だめです、なんといったって頭のとがってるのが一ばんえらいんです。そしてわたしが一ばんとがっています。」

「いいえ、ちがいます。まるいのがえらいのです。一ばんまるいのはわたしです。」

「大きなことだよ。大きなのが一ばんえらいんだよ。わたしが一ばん大きいからわたしがえらいんだよ。」

「そうでないよ。わたしのほうがよほど大きいと、きのうも判事さんがおっしやっただじやないか。」

「だめだい、そんなこと。せいの高いのだよ。せいの高いことなんだよ。」

「押しっこのえらいひとだよ。押しっこをしてきめるんだよ。」もうみんな、がやがやがや言って、なにがなんだか、まるで蜂の巣をつつついたようで、わけがわからなくなりました。そこで山猫が叫びました。

「やかましい。ここをなんどころえる。しずまれ、しずまれ。」



別当がむちをひゆうぱちつと鳴らしましたので、どんぐりどもは、やっとしずまりました。山猫は、ぴんとひげをひねって言いました。

「裁判ももう今日で三日目だぞ。いい加減に仲なおりしたらどうだ。」

すると、もうどんぐりどもが、くちぐちに言いました。

「いえいえ、だめです。なんといいつつて、頭のとがっているのが一ばんえらいのです。」

「いいえ、ちがいます。まるいのがえらいのです。」

「そうでないよ。大きなことだよ。」がやがやがやがや、

もうなにがなんだかわからなくなりました。山猫が叫びました。

「だまれ、やかましい。ここをなんと心得る。しずまれしずまれ。」別当が、むちをひゆうぱちつと鳴らししました。山猫がひげをぴんとひねって言いました。

「裁判ももうきようで三日目だぞ。いい加減になかなかおりをしたらどうだ。」

「いえ、いえ、だめです。あたまのものが……。」がやがやがやがや。

山猫が叫びました。

「やかましい。ここをなんどころろえる。しずまれ、しずまれ。」別当が、むちをひゆうぱちつと鳴らし、どんぐりはみんなしずまりました。山猫が一郎にそつと申しました。

「このとおりです。どうしたらいいでしょう。」

一郎はわらってこたえました。

「そんなら、こう言いわたしたらいいでしょう。このなかで一ばんばかで、めちやくちやで、まるでなっているようなのが、一ばんえらいとね。ぼくお説教できいたんです。」

山猫はなるほどというふうにならずいて、それからいかにも気取って、繻子のきもののえりを開いて、黄いろの陣羽織をちよつと出して、どんぐりどもに申しわたしました。

「よろしい。しずかにしろ。申しわたした。このなかで、一ばんえらくなくて、ばかで、めちやくちやで、てんでなっていないなくて、あたまのつぶれたようなやつが、一ばんえらいのだ。」

どんぐりは、しいんとしてしまいました。それはそれはしいんとして、かた固まってしまいました。



「いいえ、お礼はどうかとってください。わたしのじんかくにかかわりますから。そしてこれからは、はがきにかねた一郎どのと書いて、こちらを裁判所としますが、ようございますか。」

一郎が、

「ええ、かまいません。」と申しますと、山猫はまだなにか言いたそうに、しばらくひげをひねって、眼をばちばちさせていましたが、とうとう決心したらしく言い出しました。

「それから、はがきの文句ですが、これからは、用事こ

れありに付、明日出頭すべしと書いてどうでしょう。」

一郎は笑って言いました。

「さあ、なんだか変ですね。そいつだけはやめた方がいいでしょう。」

山猫は、どうも言いようがまずかった、いかにも残念だというふうに、しばらくひげをひねったまま、下を向いていましたが、やっとあきらめて言いました。

「それでは、文句はいままでのとおりにしましょう。そこで今日のお礼ですが、あなたは黄金きんのどんぐり一升と、塩鮭しおざけの頭と、どっちをおすきですか。」

「黄金きんのどんぐりがすきです。」

山猫は、鮭の頭でなくて、まあよかったというように、口早に馬車別当に云いました。

「どんぐりを一升早くもってこい。一升にたりなかつたら、めっきのどんぐりもまぜてこい。はやく。」

別当は、さっきのどんぐりをますに入れて、はかつて叫びました。

「ちようど一升あります。」山猫の陣羽織が風にはたばた鳴りました。そこで山猫は、大きくのびあがって、目をつぶって、半分あくびをしながら言いました。



「よし、はやく馬車のしたくをしろ。」白い大きなきこのでこしらえた馬車が、ひっぱりだされました。そしてなんだかねずみいろの、おかしな形の馬がついています。

「さあ、おうちへお送りいたしましょう。」山猫が言いました。二人は馬車にのり、別当は、どんぐりのますを馬車のなかに入れました。

ひゆう、ぱちっ。

馬車は草地をはなれました。木や藪やぶがけむりのようにならぐらぐらゆれました。一郎は黄金のどんぐりを見、山猫はとぼけたかおつきで、遠くを見ていました。

馬車が進むにしたがって、どんぐりはだんだん光がうすくなつて、まもなく馬車がとまったときは、あたりまえの茶いろのどんぐりに変わっていました。そして、山猫の黄いろな陣羽織も、別当も、きのこの馬車も、一度に見えなくなつて、一郎はじぶんのうちの前に、どんぐりを入れたますを持って立っていました。

それからあと、山猫拝というはがきは、もうきませんでした。やっぱり、出頭すべしと書いてもいいと言えはよかつたど、一郎はときどき思うのです。





日本文学電子図書館

---

どんぐりと山猫

著 者：宮澤賢治

制作者：宮澤一郎

底 本：「どんぐりと山猫」

中央公論社

昭和24年3月5日 5版印刷

昭和24年3月10日 5版発行

日本文学電子図書館